
動きゆらぐ時間

伽砂杜ともみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

動きゆらぐ時間

【Zマーク】

Z4255P

【作者名】

伽砂杜ともみ

【あらすじ】

桜の様子が、おかしくなった。海斗はその様子に、心を引き裂かれそうになる。海斗、葉、桜に真樹が加わり、繰り広げられるドタバタ中学校生活。

中学最初の体育祭は、無事に 体育祭自体は無事に終わった。昼休み。ざわめく教室の、自分の席で。鈴木海斗は、折りたたみ式の将棋盤を広げて、視線を落とし続ける。

前の席には、まるで自分の場所だとでもいつよつて、堂々と他人の席を陣取る親友、佐々木葉も同じように将棋盤をみつめている。ただ海斗とは違い、その表情は険しくしかめられていた。

「海斗」

「なんだよ」

「銀つて、どう動けるんだっけ？」

まさかの質問に、思わず海斗は口を開けた。

中学校に入学し、将棋部に入部してそろそろ半年になるというのに。いまさら将棋の駒の動かし方を聞かれるとは、思っていなかつたのだ。

「いまさらかっ！」

海斗が声をあげるよりも先に、葉が大声を出した。一瞬、同級生たちがこちらを見たが、海斗が普段、時折あげる大声に慣れているせいだろう。その後、何事もなく行動を再開している。

その声を聞いて、さすがに眉間にシワを寄せ、海斗は口をとがらせた。

「そのセリフ、絶対ボクが言うべきだろ」

「人に言われて傷つくくらいなら、自分で言つたほうがいいじゃないか」

「傷つくとか、本気で思つてないくせに」

うなるように声を出せば、葉は大きな舌を見せてきた。

それを見て、海斗は苦笑しながら、前髪を少し触った。

「銀の動けない範囲は、丁の字に動けないんだよ。右・左・下といふか、後ろというか」

「あ、そっか。じゃあ、金は？」

「おま……まあいいけど。斜め後ろが動けない。右下と左下だけな」

「ああ！なんか、そうだった気がする！」

「まあ、頑張れ」

「おう。サンキュー」

「一の字と何度もつぶやきながら、自分の駒を持ち上げて、手をさまよわせたかと思つと、結局は元の位置に戻して、葉はうめき声をあげた。

「……聞いた意味がなかつた」

「うん。そうだと思つた」

「やつぱりか」

次の手を打つまでに、まだまだ時間はかかりそうだった。

海斗は背もたれにもたれかかり、大きく伸びをした。ちょうど田の端に、じちらに近づいてくる同クラスの渡会の姿が引っかかった。

「うわ、また来たよ」

盛大にため息を吐けば、少しだけ顔をあげた葉も小さく笑つた。

「鈴木」

「兄ちゃんには会わせないぞ。つて言つたの、何度もかな」

「はあ？ まだなにも言つてねえだろ」

「じゃあ、他になんの用があるんだよ」

前髪を触つて眉をひそめた海斗に、渡会は言葉を詰まらせた。

普段ならば、会話の隙間があれば茶化した言葉を入れる葉も、将棋で手一杯だ。

聞こえるように舌打ちをした渡会は、それでも引き下がることはない。

「おまえ、じつせ口下に振られたんだろ？ だつたら、お前の兄貴ヒロトくつつけろよ」

田下桜といふ名前を出されて、海斗は顔を赤くして、おもわず立ち上がった。

同級生で、同じクラスで。海斗の片想いの少女だったからだ。――

度振られていくからといって、すぐに消せるような気持ちでもない。

「はあ？ そんなことするわけねーだろ！ だつてまだ……」

「海斗、大声出すなー」

葉の声に、我に返つた海斗は、自分が何を叫ぼうとしたのかに気づき、ゆっくりと椅子に腰をおろし、耳まで赤くして、海斗はそつぽを向いた。

「なあ、鈴木。一度も三度も振られることないってー。」

「あーもう、うるさい！ 無駄にしゃべつてる暇があるなら、真樹のどこに行つてアピールしてこよ！」

「そのほうが有意義に一票」

将棋盤から手を離さず、右手を上げた葉を見て、海斗も同じように手を上げて賛成の声をあげた。

「はい、一対一」

「佐々木には関係ない話だろ？ が。口出すな」

「超こえー。ボク、ちびっちょつ」

左右のこめかみに人さし指をあてて押しながら、葉は難しい顔をして目を閉じ、表情にまったくそぐわない軽口を叩いた。みるみるうちに顔色が変わつた度会に、海斗は小さく笑つた。

「おい、なに笑つてんだよ」

「あのさ。真樹に好かれたいんだつたら、その態度とか言い方、やめといたほうがいいよ」

「うるせえな、おまえに関係あるのかよ！」

「うるせえな、おまえに関係あるのかよ！」
「うるせえな、おまえに関係あるのかよ！」
「うるせえな、おまえに関係あるのかよ！」

「あーもう、うるさい！」

「ボクには関係ないけど。兄ちゃんは、そんな言い方しないよなー」と思つて

赤く染まつた顔で、度会は言葉を詰ませた。

反論できない怒りを、将棋盤の乗つた海斗の机を蹴り飛ばすことできらし、足音も荒く教室から姿を消した。その派手な音に、教室に残つていた同級生達が身をすくめついたが、少しして肩をすくめた

海斗と葉を見て、緊張が解けたようござわめきが戻つてくる。

「まつたく！ しょうがねーな、渡会は」

「とか言つて。勝負が終わつて、ほつとしたんだろ」

「そんなこと、これっぽっちも思つてゐわけないじゃないか。海斗くん」

「うわ、嘘っぽい」

心をはずませています。といつ葉を体現して、葉は身軽に椅子から立ち上がり、倒れた机を戻し、将棋の駒を拾い始めた。それを見て、海斗も一つため息をつき、重い腰をあげた。

「まあ、葉が二つ覚えたからいいか」

「なんのことだよ」

「金と銀」

ああ、と葉は天井を見上げ。そして、そういうえばと付け加えて笑つた。おもわず口を開け、目を丸くした海斗を見て、もう一度大きな舌を出す。

放課後、部活が始まるまでに忘れていそうな気がして、海斗は将棋の駒を拾いながら、違いないと笑い声をあげた。

昼休み一杯かけて、駒を拾い上げた二人は、チャイムの音に慌てて席へと戻る。

生徒達が教室に戻つてくる。

海斗は、机を直しながら、ふと違和感を覚えた。女子数人が、海斗を見て小さく笑つた気がしたのだ。

しかし、特に話しかけてくるわけでもない。海斗は少しあごを引き、気づかれないでいどに首をかしげる。先生が入つてくる直前で、黒い長髪を三つ編みに結つた少女、桜が慌てて飛び込んでくる。斜め後ろの席に座つていた葉が、なにやら笑いながら声をかけているが、振り向きもしていない。

いつもなら、うるさいといつ声が海斗の席にも聞こえてくるはずなのだが、ただ、小さな声で返答したくらいだつたのだろう。葉が小さく肩をすくめていた。

日直の号令で礼をし、授業が始まれば、心に生まれた違和感も薄れていった。とにかく来月の中間テストだけは赤点をとれないからだ。

文化祭という名の文化部、クラブ活動発表会が、一ヶ月後に迫った中間テストの後に待っている。テストそっちのけで準備に追われる人間が多く、浮かれた雰囲気がそこかしこにある。

しかし海斗達は、それよりもテストに必死だった。

生徒会長と副会長が、部長や副部長を兼任している将棋部で、赤点を取る人間を出すことは許されないと、高らかに宣言されたからだ。知ったことかと、非難の声をあげたのだが、一年生の自分達の意見など聞き入れてももらえるはずもない。

「赤点取つたやつは、全校生徒がお祭り気分の中、補習させるからな」

横暴ともとれる生徒会長兼部長の藤本の言葉に、兄のいる海斗は、抗議しても無駄だと口をとがらせるくらいであきらめたが、葉は必死に食い下がっていた。

結局、くつがえることはなかつたが。

とりあえず残りの授業では、ノートを取ることに専念していた。放課後、部活に向かう一人の足取りは、いつも以上に重い。

「なあ、海斗」

「帰らせないぞ」

「おまえは、超能力者か！ だつたら、テストの山張つてくれよ！ 教えてくれよ！」

「そんなもん、先生がテストに出るぞつて言つてたとこ、全部覚えろよ」

「無理だから言つてるんじゃないか」

口をとがらせて、葉は足音も荒く歩き出した。

人通りが少なくなつた廊下で、海斗は気にするように振り返る。しかし、誰かの笑い声が遠くから聞こえてくるくらいで、突き飛

ばしてくる見知った少女はない。

「どうした？」

背後から尋常ではないため息が聞こえ、葉が振り返った。視線をひょろりとした彼に戻し、海斗は言いつらわうと口を開く。

「あのや。桜、今日おかしくなかつたか？」

「別に、普通じゃね？」

「ほり、昼休み終わつた時だつてや。桜の返しが弱かつた気がするんだよね。なに言われたんだよ」

「なにつて。話しかけるなつて言われたな。弱いどこひか、針山ぶつけられたかと思つたけど？」

「そつか。じやあいいや」

良くないだる。と、海斗の肩を激しく揺さぶるが、意識は葉からそれていた。いつたんおさまつていた違和感が海斗の心を埋め尽くしていたのだ。

「……いじめ、か？」

一番に思い出したのは、授業が始まる前に、教室に駆け込んできた三人の同級生がいた。海斗を見て、含み笑いをしていた女子だ。たしか小野、三津、西田だつたはずだと、思い返す。

しかし、なにをしたのかが海斗にはわからない。目が合つて、そらしながら笑つたからには、なにか知らない所で事が進んでいるのだろう、とは思う。

放課後、いつもならなんだかんだで声をかけてくる桜が、振り向きもしなかつた。運動部は、文化祭で特に準備することがないはずなのに、慌てて教室を出て行つた。

考え込んでしまつた海斗から手を離す。タレ田の顔がのぞき込んでくるのが見え、海斗はもう揺さぶられていないうとに気がつく。

「な、なんだよ」

「なんだじやねーよ。今のは、断じていじめじやないからなー。ほらあれば、友人同士のじやれあいつてやつ

「は? なんのこと?」

「なんの」とって、おまえ……おわか、桜のことしか頭になかったら

「

「え？ うん。そりゃ そつだろ」

だつて、と続けるよりも先に、葉がおおげさに頭を抱えた。

「好きな女しか、頭にないのかよ」

「ち、違うよ！」

葉の言い方に、海斗は目を見開いて思わず声をあげるが、葉は頭を抱えたまま、イヤイヤをするように身体をよじらせる。

そして、海斗に背を向けたかと思つと、彼は口の左右に広げた手を添えた。

「振られたのに……おまえ、振られたの！」

絶叫に近いその響き渡る声に、海斗は慌てて友人に飛びかかった。右腕を彼の首に巻きつけ、締め上げる。葉は腰を折り曲げながら、ギブアップを宣言するように、締め上げ続ける右腕を必死で叩く。仏頂面のまま手を離してやれば、両手両膝を廊下につけて、葉はうめいた。

「……悪かったって

「なら言つなよ」

「で？ 桜がどうしたって？」

「うん。なんかさ、昼が終わってから、ひょっと変な感じがしたんだよね」

「なんだよ。ひょっとして、いじめとか言つてたアレか？」

葉が立ち上がりながら、なにかを思い出すような表情をしたが、海斗に顔を向けた時は、さっぱり分からないと肩をすくめた。

「ギリギリに駆け込んできてたけど、なんかおかしかったか？ あ、でも、いつもより返しが厳しかったかも」

「その前だよ。なにか気づかなかつた？」

アゴに手を当てて目を閉じた葉は、しばらくその状態であったが、少しして体ごとゆっくりと傾いていく。

真ん中分けにした前髪の一房に手をやつて、海斗は口をとがらせ

た。

「おまえ、考える氣ないだる。もういいよ、氣のせいかもしれないし」

「良くないだる。海斗のラブなハートが、危険信号を発したんだろ？」

「棒読みみつてことは、自分でもキモイとか思つてるんだろ」「バレたかと、大きな舌を出した彼に、どうしてもため息がでしまう。

「いいか？ 昼休みの違和感。そして、逃げるように部活に行つた桜。いつもだつたら一言でもなにか言つていいくにせ、日も合わそうとしなかつたんだぞ？」

「それが海斗君にとつては、寂しくて仕方がなかつた、と」「ち、違うだろ！」

「じゃあ、海斗の言つ違和感つて何だよ」

「それは……自意識過剰とか思われるかもだけど、昼休みが終わつた時、教室に入つてきた女子がボクを見て笑つたんだよね。何か企んでるようを感じたつてくらいだけど」

「うわ。男の敵発言にも聞こえる」

「違うつて！」

誰もいなくなつた廊下の、隅々にまで響き渡る声。

「おー、響いたなー」

氣楽な声をあげた葉だつたが、その大声が、予期せぬ人物達を呼び寄せることになつてしまつてはいたが、まだ一人は気づかない。

「でもさ、ここで海斗が悩んでも、どうしようもないだろ」

「だからつて、桜が辛い思いしてゐるのに、見て見ぬ振りだけは絶対したくない」

「だよな。だからつて、桜なら氣に入らないことがあれば、まず自分でなんとかしようとするだらうしな」

「ボク達には、まだ頼るまでもないつてことなのかな？」

窓に寄りかかり、うなだれる。真つすぐな前髪が、海斗の目を隠

すようにおりた。

その言葉に返事をするでもなく、柔らかそうな短髪を大きく搔きながら、眉間にシワを寄せ、不機嫌そうにタレ目を細める。あからさまに落ち込んでしまった親友に、なにを言ひてやればいいのか分からぬのだ。

「そうだな。と言えば、もっとへこむのだろう。だからとこつて、根拠もなく違うとも言えない。

海斗ではないが、長く続く廊下に向かつて、大声を張り上げたい気分になる。

そうしてやろうかと、海斗のいる方向とは別の方向に振り向いて、動きを止めた。

「藤本、部長……」

「めぐみよに、声をしぼり出せば、海斗が慌てて窓から身を起こす。

「サボリかと思つて来てみたら、何やら面白そうな話をしているじゃないか」

「気のせいです」

ゆつたりと歩いてくる藤本部長に、何と言つたらいいのかと、口をつぐんでしまった葉に対し、海斗が間髪入れずに、堂々と胸を張つた。

「そうか？ じゃあ、頼りない鈴木海斗くんは、頼り甲斐のある男にならなくてもいいわけだ」

「……だから、いつもどこから聞いてるんですか」

大きな目をさらに大きくして、海斗は言つても意味がないと知りながら、口に出さずにいられない。

案の定、藤本部長は一つうなずいて、楽しげに口の端を大きく持ち上げた。

「君の大聲は、すゞく便利だと思つた。それで詳細は？」

「言ひませんつて」

「言わないところには、氣のせいではなかつたといつてになる」

言い負かされた海斗は、悔しそうに歯をかむ。隣では、葉が感心した声を出していた。

それを聞いて、藤本部長は満足そうに笑う。

「あきらめろ、一年生」

「そう言われても……まだ確証のある話じゃない」

「そういう。海斗の違和感だけだもんな」

「違和感？」

藤本部長が鋭い目を光らせる。

「口」もりながら、それでも海斗は困ったように前髪くと手をやつした。

「クラスの女子三人が、昼休みの終わりに教室に入ってきた時なんですけど、こっち見て笑つたんです」

「おまえ、なかなかやるな」

「藤本部長もそう思いますよね！　だからさつきから、男の敵だつて言つてたんです」

「だ、だから！　違つて言つてるだろ！　やうじやなくて、なんてこうか、あざ笑つ感じつてこつか。バカにされてるつてこつか……笑いの中に、絶対に何か含まれてるつて思つたんだ」

海斗の言葉に、藤本部長はアゴに手をあて、考えを巡らせているようだった。

考える振りをしていた葉とは違い、しゃべりはじめてから、言葉を選ぶように口を開く。

「それに続くよつて、頼つないところ葉が出了。ところとは、アレか」

「そう！　やつすが部長、ソレっす」

「たぶん間違つてなによつた気があるけど、やうじやうに言われ方つてなんか嫌だな」

「まあそつ言つた。それで、彼女の態度はどうだったんだ？」

完璧に言い当てられている。海斗は逃げ出したい気持ちを抑えるよつて、腹に近い学生服のボタンがくつつこっている服」とにぎつた。

「昼休みは、先生と同時に床に寝つてきて、葉の茶化しに振り返りもしなかったし、部活に行く前も、ボクにも葉にも田を合わせずに出て行つたんだ」

「だから、海斗くんは寂しくて仕方がないんですよ。部長」腕を組み、知つた顔をして大きくなずく葉を見て、藤本部長は小さく吹き出した。

だがすぐに笑いを引っ込めて、眞面目な顔で問いかける。「オレにはどうして恥むのが分からぬけどな」

「だつて、確証がないから……」

「君達は、桜並木を守らうとしたんじゃなかつたか？ それはどうしてだ。守つてくださいと桜の木に頼まれたわけじゃないだりつ」

藤本部長の言葉に、海斗と葉は思わず顔を見合わせた。

「結果はどうあれ、正しいと思つて動いた。やれると思った。それは悪いことなのか？」

「……悪いことじゃ、ないです」

「じゃあどうして、またしても桜が手折られそうになつてゐるのに、躊躇する必要がある？」

沈黙が降りた。遠くから、かけ声やボールの音が反響して聞こえてくる。

どこかで怖がっていた自分に気づき、海斗はそれを振り払つように頭を振つた。

「藤本部長、思い出させてくれて、ありがとうございました！ 部活、行きます」

頭を下げる。上げた時には、何か吹つ切れた顔をしていた。

「お、おい。海斗？」

呼び止めようとした親友に、海斗はうなずいて見せた。そして、一人を置き去りにして、軽やかに廊下の角を曲がつていった。

それを藤本部長は、満足そうに見送る。

「やはり、時期生徒会役員についてつけだな」

「うわ。まだ言つてる」

葉がげんなりした顔を見せれば、藤本部長は心外だとばかりに、細い肩に手を置いた。

「当たり前だろ？ 正しく、すべき事を知っている人間なんて、そういうないんだぞ？ それは鈴木海斗くんだけではなく、佐々木葉くん、君も同じだ」

「海斗を進呈するから、ボクはほつといて欲しいんだけど」逃げるようすに海斗の後を追つて角に消えた葉を見送つて、藤本部長は三人の少女達が笑つたは違う、はつきりと企みを乗せた笑い声をあげた。

「やべーぞ！ まじやばい！」

すぐに追いついてきた葉の剣幕に、海斗は首をかしげた。

「なにかあつたのか？」

「部長、ボク達を本気で生徒会役員にしたいって思つてる…」

「なんだそれ。無理に決まつてんじゃん」

階段をのぼりながら、気楽に返してくる海斗に、葉は真剣な顔を寄せる。

「そうでもないんだよ。文化祭終わつたら、生徒会の役員選挙があるだろ？ それに向けて、なにか企んでるに違いない！」

「考えすぎじゃねーの？ どっちにしろ、ボク達が届け出を書かなきゃ問題ないって」

「……そつかな。そつか、そだよな」

不安の残る顔をしていたが、葉はそれでも自分を納得させたようだつた。

将棋部兼写真部として使われている教室の扉を開ければ、待ち構えていた一年生の二人組みが、海斗と葉の腕をそれぞれ確保する。

「な、なんですか！ ボク、男と腕組む趣味ないんですけど」

「おれだつて、そんな趣味ねーよ！」

いいからこつちへ来いと、一人は窓際へと連れていかれる。

葉が海斗へと視線をやれば、海斗も眉をひそめ、小さく首をかし

げて見せた。

机が一つ、少し離して並べられている。その上には、将棋盤がそ
れぞれ置かれ、駒もしつかり並べられていた。

「……試験勉強は？」

「今日は、やらなくていいみたいだよ」

座れとうながされ、海斗も葉も、それぞれの机につく。

葉の向かいには、河合副部長が座つた。それだけで、葉は燃え尽
きていた。

それを見て、海斗の向かいには、藤本部長が座るのだろうと思
ながら、窓の外に目をやつた。

三階から見下ろした先には、テニスコートが広がっている。ジャ
ージ姿の女子達がせわしなく動いていた。一年生は、コートから出
た広い教職用の駐車場で、仲良く素振りをしている。

長い三つ編みを、自然と探すクセがついていた。例の三人組も同
じ部活だということは知っている。昼間のことがあったため、少し
心配していたが、いつもの位置で、素振りを繰り返している桜を見
て、安心する。

「……大丈夫そうかな」

「海斗、そのうちストーカー呼ばわりされそうだな」

部長が来るまで、葉と副部長の勝負も始まらないらしく、間がも
たなかつた葉が海斗の後ろから外をのぞいていた。

「ストーカーなんかじゃないよ！」

あまりの言い草に、驚きながら声をあげれば、葉は先を読み両手
で耳をふさいでいた。

窓が開いていることに気がつき、おそるおそる外をのぞけば、何
人かが素振りをしながら見上げ笑っていたが、桜はこちらを向くこ
とはなかつた。

心臓が、誰かに力一杯にぎられたようだ。

海斗は、自分の胸に手を強く押し当てる。苦しくて、息がじづら

い。

陸のことが好きだと、桜が言つた時の苛立ちと、どこか違つ気がした。

ひどく動搖しているのに、足が固まつてしまつたように動かせずにいた。

海斗の異変に気づき、葉は窓から親友を引き離す。

「水、飲んでくるか？」

心配してくれている。ところどころは気がついているが、うまく言葉が出てこない。

「どうした？ 頬色が悪いな」

「今日は、色々あつてですね」

尋常ではない表情をしていたのだろう。河合副部長が立ち上がり、葉が適当に「まかそうとしてくれる。

顔をあげ、無理に笑顔を作つてみる。そして、大丈夫です。と声を出そうと口を開きかけたが、先に出てきたのは大粒の涙だった。

居合させた先輩達は、それぞれ目を丸くし、息を呑んだ。一年生達は一人とも、田をそらしてくれる。副部長は、海斗が話すまで待つ姿勢を崩さない。葉はとりあえず海斗を椅子に座らせた。しゃくりあげるまではいかなかつたが、流れ続ける水分に、一番驚いていたのは、海斗自身だった。

「うお、なんでだ」

おもわず口走った海斗に、固まつた空気が少しなごんだ。

「ちょっと溶けてるけど。これでも食べて、落ち着くといいよ」

そういつて河合副部長が差し出した物は、パイナップル飴だった。写真部を作つた真樹が、部室を将棋部と共にしてから、姿を消していた菓子類だ。海斗は胸の痛みをそのままに、それでも小さく笑つた。

「ありがとうございます」

「たまには、いいだろ？」

「あ。ボクも、ボクも！」

アピールするように手をまつすぐ伸ばした葉を先頭に、一年生も同調してくれる。

「残念。品切れだよ」

笑いながら両手の平を見せれば、葉が口をとがらせた。

「……泣く」

やつと涙を止め、飴を口に入れた海斗をふくめた、全員が葉を見る。

「どうした？ 葉くん」

「ボクも、泣く！」

さきほどと同じように副部長が問えば、力強く宣言していく葉に、全員が腹を抱えて笑い声をあげた。

「なんだ、元氣があり余ってるじやないか

「なにがあつたの？」

藤本部長と真樹が、騒がしくなった教室に入つてくる。

一瞬声が切れ、誰もが視線を泳がせた。

「……あれ？ 誰か、飴なめてない？」

かすかに漂う甘いにおいに気がついた真樹が、眉をひそめ全員を見回す。

最初に少女が部室へ来たとき、菓子類を持ち込まない。と、ひどく怒られていたのだ。

海斗は、口の真ん中に飴を置き、口を閉じ続ける。どうしたらいいのか、と葉に視線をやれば、葉も口を閉じたまま、副部長に丸投げするように視線を送る。

少し苦笑して、共犯である河合副部長が助け舟を出した。

「藤本、今日の勝負は持ち越しにしようか。海斗くん、トイレに行きたいんだろう？ 顔でも洗つてくるといいよ

「あ、そうだな。ボクも付き添いまーす」

海斗は、扉の近くに立つ真樹の横を通り前から息を止めた。鼻からにおいが漏れることを恐れたのだ。

疑いの眼を向けられたが、一瞬で泣いたと分かる赤い眼をしていましたからだらう。呼び止められることはなかつた。ただ、その代わりに葉がつかまり、口中チヨックされていたが。

教室から離れ、トイレの前に来てから、やつと葉が胸をなでおろす。

「やばかつたなー」

「ほんとだよ、部活中ずっと正座をせられる所だつた」

口の中で、やつと餌を転がすことができた。

渋い声を出した海斗に、葉はまた小さく笑う。

「なんだよ」

「おまえが泣くとは思わなかつたからさ」

「自分でも驚いたよ」

疲れた笑い方になつてしまつてゐるとは思つたが、そのまま笑いながら、前髪に手をやつた。

「海斗もつらいかもしれないけど、桜が一番我慢してゐるんだらうな」

「そうだな。帰り、待ち伏せする予定なんだけど」

「つていうかさ、その三人つて誰だよ」

「誰つて、必要か？」

「あたりまえだろ。海斗が泣くなんて、よつほどだからな。ボクも親友として知る権利がある」

海斗は、良いにおいをした息を吐き出して、しぶりながらも降参した。

「……小野と三津。あと西田だつた」

「前の二人は気が強いからありそうだけど、西田は意外だな」

「そうか？」

「そうだよ。まあ海斗は桜しか見えてないから、仕方ないけどね」

言い返す言葉も見当たらず、口元もむしかなく、ただ前髪に手をやつた。

葉は小さく肩をすくめ、すぐになにかに思い当たつた顔をする。

「でもさ、あいつら。たしかテニス部じゃなかつた?」

「やうなんだよ。だから、ちょっと心配だけど、見てた感じは大丈夫そうだった」

「それで泣かされてたら、意味ない氣もするけどな」

「つるさこよ」

特に汚れたわけでもないのに、葉は蛇口をひねり、手を洗い出す。それを見て、思い出したように海斗も顔を洗った。水の流れをただ見ながら、葉は難しい顔をする。

「この後、どうするんだ？」

「とりあえず帰りは待ち伏せしようと思つてる。明日は、どこで行くにもつきまとう」

「トイレとかは、どうするんだよ。ストーカー以前に、痴漢だぜ？」

「そうか。そうだよな」

ハンカチで顔を拭きながら、海斗は少し視線を落とした。考えるまでもないことだが、ついて行くという選択肢はない。

「そこは真樹に、頼んでみるよ。さつそくだけじ、明日一度、なんとかしてみる」

「渡り廊下か？」

「渡り廊下だる」

二人は顔を見合わせて、もう一度笑つた。

部室に戻り、外の様子を見ながら、時間をつぶす。部員や真樹からは、贋れ物を扱うようだつたが、自業自得なため我慢するしかない。

葉は、カメラのことで話があると真樹を廊下に連れ出して、説明したようだつた。すぐに戻ってきた彼女は、表情を硬くしながら、海斗にうなずいて見せた。

河合副部長と話しあつてゐる藤本部長に、真樹は顔と同じくらいいい声で詰め寄る。

「藤本会長、テニス部に文化祭のための写真を撮りたいとお願ひするのは、校則違反ですか？」

「いや、顧問と部長に願い出てみて、オーケーが出たら問題ないだ

「うう

「わかりました。これから行つてみます」

カメラが入ったカバンを肩にかけ、出て行こうとした真樹に声をかけたのは、男性陣だった。

一緒に行こう。といつ声をぱつぱつと切り捨て、一人飛び出していく。

「……おしかつたな」

写真部を掛け持ちしている葉が舌打ちとともに言えれば、同じく掛け持ちをしている一年生一人も真剣な顔でうなずいている。

しばらくして、テニスコートに走つていく真樹の姿が見えた。どうやら、許可は得たらしく、広がつて素振りを続けている一年生のそばでカメラを出していた。

なんでもないような顔をして、近くで桜を見守りうつしていのだろう。カメラを構えてうわつこていれば、誰も下手な動きはとれないはずだ。

真樹の考えがはつきりと読み取れて、海斗は自分がその位置にいられないことに悔しさを覚えた。だが、できることをするのだ。自分で、できることがあるはずだ。と、言い聞かせる。

「帰りは、真樹が一緒に帰るつてさ。話をしたら、ボクと海斗は一緒じゃないほうがいいのかもつて」

「は？ なんでだよ」

「わからないよ。でも、女は女の事情つてのが、あるんじゃね？」

結局、なにもできないのかと、海斗は机に突つ伏した。

なぐさめるでもなく、葉は快活に笑う。すさみかけた心にその明るさが染みこんで、机に顔をくつつけたまま、海斗もつられて笑っていた。

「考えるのが、面倒くさくなつたじゃんか」

「海斗は、無駄に考えすぎるんだ。任せられる」とは、任せとねばいいんだよ

「まう。良じことを言つね、佐々木葉くん」

一つの机を囲んで座っていた一人に、藤本部長が近づく。嫌な予感しかしなくなつた葉は、ファイティングポーズをとつていた。

「た、たまには、良いことくらい言いますよ」「じゃあ、ちょっとだけこれに名前を書いてくれたまえ。考へることなく、気軽に書いてくれれば、それでいい」

差し出された一枚のA5用紙には、生徒会役員に立候補する」とを宣言するようなことが書かれていた。海斗の方の書類には、会計。葉の方には、書記として。

海斗は大きな目をできるだけ細め、破いてしまおうかと思つたが、正式な書類のようなので、からうじてこらえた。田の前にいる親友も、同じような表情をしていた。

「部長、だまされないですって」

「葉の言つとおり。こればかりは、考へるに決まつてるじゃないですか」

「そつか？ では、考へた後に記入してくれたまえ」

「そういう問題じゃなくてですね」

「どういう問題だ？ 女一人、守れもしないで。せめて守れるくらいの立場を作つたほうがいい。関係ないとは言わせない立場をな」 真面目な顔で見下ろしてくる藤本部長に、海斗はうつむいた。

正面に座る葉からは、負けるな！ という無言の圧力が強く伝わつてきていたが、反論できる要素が足りない。傷心している状態では、ただ混乱して、返す言葉がまとまらないのだ。

三年生を前にして舌打ちもできず、だがそれでも葉はかみつくことをあきらめなかつた。

「ボクは、特に重要じやないから、やらなくてもいいかな」

「そつか？ 真樹ちゃんだつて、自分の立ち位置を考へて動いていふのに、君は戦友を見捨てるわけだ」

「戦友つて……」

「桜並木を救うために、一緒に戦つた仲間だう？ 誰だつて知つ

てる話だ。かわいそうに。一年のクラス替えで一人になつたら、桜ちゃんはどうなるんだろうね

おどしか。と思ったが、葉は口に出せずにいた。

だが、ほんやりと第三者な気分で一人のやりとりを聞いていた海斗が、やつと疑問を口にした。

「だつたら、桜が生徒会に入れば、問題はなくなるんじゃないかな」とても良い案だと思ったのだが、返ってきたのは藤本部長の、なにかかわいそうな者を見る目だつた。

「桜並木を救おうと頑張った勇者は、三人だ。三人組であることに、意味がある。わかるか?」

「はあ」

海斗の空返事で、言いたい内容が伝わっていないことをさとつた藤本部長は、ゆっくりと言い方を変えた。

「……いいか。この学校にいる、ほとんどの人間があの事件を、君達を知つていいんだ。そのつながりや絆は、これまでにないほど強いだらうと、口に出れりとも、みんなが思つていいんだよ」

「そうですか?」

伝えたいことが、半分ほども伝わっていないことを読み取り、藤本部長がより分かりやすい言葉を選ぶ。

「君達のうちの誰かに何かあれば、他の者達が許さないだらう」とも、どこかでわかっている。だから、気に入らないことがあれば、裏で動くはめになる。もし発覚したとしても、関係ないと言われたら、身動きがとれなくなるんだぞ?」

藤本部長の言いたいことが、やつと海斗の頭でも理解できるようになつていた。

しかし、その言葉が合つていても答えるし、どこか違うと思う自分もいた。

なにが違うのかと言われれば、すぐには答えられない。もう少しだけ時間が欲しかつた。

「……とりあえず持つて帰つて、考えます」

「海斗！」

悲鳴に近い声をあげた葉に、海斗は口をとがらせた。

「わかつてゐよ。今は脳みそが回らないから、じっくり考えるだけだつて」

「考えるまでもないのに」

あきらかに肩を落とした葉だったが、それ以上は言わなかつた。そして、一人とも窓の外を無言で見下ろした。

次の日の朝、葉と打ち合わせしていた通り、海斗は一時間早めに家を出た。

どうしても、桜に直接聞いておきたかったことがある。

なにを言われても、昨日葉がしてくれたように、自分の気持ちを笑い飛ばせばいい。

そう意気込んで家を飛び出たら、桜が通りかかったところだつた。驚きをそのまま表情に出した彼女は、すぐに態度を硬化させて、足早に去り立つとする。

「桜つ！」

会つたら聞いつとして、ずっとと考えていた言葉が、叫んだ途端忘れてしまつた。あいつもされないとは思わなかつたため、心がひどく動搖している。

それでも、そのまま駆け去つてしまつたが、桜は振り向くことはせずに、足を止めた。

慌てて駆け寄り、彼女の前に立ちふさがる。

「聞きたいことが、あるんだけど」

「ごめん、急いでるの」

「なにか、言われたんじやないか？ 小野と三津と西田」「

桜の細い目が、大きく見開かれた。

遠回しに言つ予定が、ピンポイントで当たつてしまつたようだ。しまつたと思ったが、結局行き着くところは、そこなのだ。すぐに開き直つて、まっすぐに桜の目を見た。

しかし、すぐになんでもなかつた顔をして、桜は薄く笑う。

「なんで？」

「桜の様子もおかしかつたけどさ。普段田につかない三人が、不自然だつたから」

「なんでもないよ。あ、昨日の部活の時に叫んでたよね。ストーカーじゃないよつて。今の海斗、ストーカーみたいでキモイ」
さすがにそこまで言われるとは思わず、海斗は息を呑んだ。

固まつてしまい、なにも言つてこなくなつた海斗を見て、桜は二つ分けにした三つ編みの片方をにぎりしめ、それだけ？ と笑顔を作つた。

声も出せない海斗の横を、桜はいつも通りの足取りですれ違つた。
「海斗には、関係ないし」

その言葉に、海斗は唇をかんだ。その言葉は、おそれらしく言われるだろうと考えていたのに、桜の口から出る言葉は、心に受けた衝撃が重かつた。

ここで負けるわけにはいかないと、勢いをつけて振り返る。少し離れた冬服に身を包んだ桜の背中は、どこか無理をしているように見えた。

「関係ないわけ、あるか！」

海斗の大声に、桜は小さく震えて、足を止めた。

昨日から言われていた違和感を、吐き出した感じがした。怒りも、もちろんある。だが海斗は桜の口から嫌いと言われたわけじゃない。「そうだよ、関係ないわけない。なんて言われても、ボクは桜が好きだし、桜が傷つくなつたくない。でも自分でなんとかしたがるのも知つてる、好きなだけ動けばいいよ。ボクも、自分が感じた不自然を解決する」

「なに、言つてるの？ そういうのがストーカーだつて言つてるのに！」

振り向きもせず、声を張り上げる桜に、海斗ではない声が反論した。

「世間一般じゃそうだら一けど、桜が本気でそう思つわけねーだろ」「崩れ落ちそうなところを、氣力だけで立つていて海斗の肩を叩き、息があがりながら悪い遅れたと片手をあげて謝つてくる葉がいた。振り向いた桜は、途方に暮れた顔をしていた。

その表情を見て、葉と海斗は顔を見合わせる。なにかあつたことは、たしかなのだろう。

家の前であつたため、海斗の母が大声に反応して玄関を開けて、声をかけてきた。

「あら葉くんもいたのね。海斗、外で大声出すのも良くないから、家で話しなさい。どうせまだ早いでしょ」「

「……私、急ぐので」

「桜ちゃんに、少しだけ見て欲しい物があるのよ。ほら、うちは男の子ばかりだから、役に立たないことが多いっていつか。多すぎるっていうか。ね？ 少しだけだから」

困った顔をして、だが有無を言わさない雰囲気がある。ただ内容が内容なだけに、みんなが「」の中、海斗が前髪をつまみながら不満の意を表明した。

「悪かつたな。どうせ役に立たないよ」

「あ、ごめん」ごめん。役に立たないんじゃなくて、女心がわからないの間違いだつたわ」

「あれは女心とか関係ないと思うけど…」

「いいや、関係あるに決まってるでしょ！」

「ないもんね。あるもんね。ど、玄関先で言い合ひを始めてしまつた二人を見た桜は、あははと声をあげて笑つた。

「お、笑つた」

「葉、うるさい…」

「うるさくないもんねー」

葉が瞳をくるりと回して、海斗親子の真似をすると、桜は小さく笑つて歩き出した。

海斗宅へ、向かつて。

「じう？ じう？ 桜ちゃん」

居間に通された三人が、少し居心地が悪そうに、誰が先にしゃべり出すかで遠慮しあつていて、海斗の母が嬉々として白い物体を、桜に差し出す。

小さな白い陶器で出来た物体は、一輪挿しには間違いないだろうが、なんの形なのがよくわからない。桜は、とりあえず穴の開いているのが上だろうと考え、じつくりとながめる。

柔らかく女性的な丸みを持ったそれには、口の部分が、羽が三枚重なったような作りをしていた。

横から、興味津々な様子で葉がのぞいてきたが、なにも言わない。おそらく、考へているのだ。

なんと答えたたら、正解なのだろうか。桜は考えを巡らせて、口の部分を指差した。

「え……と、鳥かなにかですか？」

「ほーらー！ 誰が見てもわからないんだって！」

ガツツポーズをして、海斗は勝利の声をあげた。

「でも、じこのぐびれが綺麗でかわいいですね」

と、苦しくもつけ加えると、海斗の母は桜を陶器ごと抱きしめた。

「桜ちゃん、優しい！ フォローでも、おばさん嬉しいわー！」

「あ、やめろよ！ 恥ずかしいだら！」

その思いがけない行動に、海斗が慌てて口をはさむが、海斗の母は意地悪な笑みを浮かべてくる。

「お母さん、恥ずかしくないもの。あ、ついやましこんでしょ。渡さないわよ」

「いらな……」

言いかけてやめ、海斗は顔を赤くして、きたねーぞと呟いた。

「海斗、心の声。心の声」

葉が楽しそうに手を細め、肩を組んでくる。なんのことかと怪訝な顔をした海斗は、じこまで声が出ていたかがわからず、しつかり

と口を閉じた。

「それで、これはなんですか？」

「これはね、風の妖精って書いてあつたのよ」

「へえ！ それでちょっと羽っぽいんですね」

「そうなのよ！ やつぱり女の子は、いいわあ。うちの男どもは、みんなダメ。羽なんて氣づきもしなかつたもの。口をそろえて、ギョウザ？ なんて言つのよ。失礼でしょ？』

海斗の母が、子供のように口をとがらせて見せると、桜は声を立てて笑つた。

昨日からの空氣の重さが、綺麗せっぱり消えていた。ふつされたような雰囲氣さえ感じられる。

機嫌の良くなつた海斗の母は、一輪挿しを手にスリッパを鳴らして、居間から出て行つた。

「桜、あのさ……」

「ごめんなさい。私、ひどいこと言つた。謝つて済むような内容じゃないこと、言つちやつた」

「いいよ。そんなの」

ソファから立ち上がり、海斗の前で大きく頭を下げる。

そんなことをさせるために、声をかけたわけじゃなかつたのだ。海斗は両手を大きく横に振つて、やめさせようとすると。

「そうだよな、別にいいよな。だつて海斗、桜が無視するから、寂しくてしようがないんぢゅーつて言つてたし」

とんでもないことを、しれつと言つてのける親友に目をむいた。

「言つてないよつ！」

耳まで赤くして絶叫する海斗を予測して、桜と葉は先手を打つて、耳をふさいでいる。

もういいかな、と一人は手を離し、葉はしみじみとつむざいた。

「まあ、今回は本当に驚いたかも」

「あー、昨日のことなら、言つなよー。」

口止めするのを忘れてたことに気がつき、慌てて念を押したが、

タレ田が面白くて仕方がないといつぱりにゆがんだ。

「泣いちゃつたもんな」

これは絶対言つと感じていたのか、葉が声を出すとともに、海斗はアーだの、ワーだと大声をあげた。

「なに？ 海斗、聞こえない」

「聞こえなくていいんだよ！」

「だからー、泣……」

しつこく言い続けようとする葉の首を、左腕で締め上げる。

「海斗。おま、本氣だろ。この力、本氣だろ」

「本氣に決まつていいじゃないか。残念だなー。こんなとこりで親友を失くすとは」

「ぎ、ぎふ……マジ、ギブ！ 『めんなさい』」

葉の顔色が、赤くなってきたのを見て、やっと腕を放した。

本当のことなのに、とつぶやきながら首をさすり、それでも繰り返して言つことほしなかった。

だが、いついたずら虫が騒ぎ出すかわからない。すぐに桜へと向き直り、本題を切り出した。

「それで桜、なにがあつたんだよ」

「……ごめんね、言えない。私の口から言つべきじゃないと思つじ」

目を伏せて、桜は少しうつむいた。

「でも、だからといって海斗も葉も、嫌いになつたわけじゃないの。海斗にあんな傷ついた顔、させたいわけじゃなかつた。さつきひどいこと言つた後、私なにしてるんだろうつて、苦しかつた」

「苦しいなら、間違つてるんだろ。簡単じゃん、元に戻れば問題ない」

「そう簡単にも、いかない気がして」

葉のお気楽な言い方に、桜は困つたように小首をかしげた。

「簡単だろ。なあ、海斗」

「簡単じゃん。誰が大切かなんて、自分で決めるもんだろ？」

さも当然に言つてのける一人に、桜は数回、まばたきをした。

突然長い三つ編みを揺らして、おかしな考えを振り払つように首を横に振つた後で、嬉しそうに笑う。

「ごめん！ そうだよね。違うよね、間違つてた。だからって海斗を傷つけていいはずがないもん。私じゃないみたいで、気持ち悪かつた。気を使うのは大切だけど、顔色つかがつてばかりの友達なんて、友達じゃないよね」

「そうだよ。桜は、桜だからいいんじゃないかな」

やつと明るい桜に戻つたのを見て、海斗は安心したように笑つた。葉も腕を組んで、大きくうなづく。

「良かつたよ。これで、海斗の泣き顔見なくて済むし」

さらりと衝撃の言葉を吐き出して。吐き出した本人が、しまつたという顔をした。

大きな目を、さらに大きくしながら、海斗は息を吸い込んだ。
「な、泣いてなんてないよつ！」

本氣でつかみかかってきた海斗から逃げ回り、葉が笑いながら謝るため、さらに火に油をそそいでいる。

「おい、海斗。朝っぱらから、うるせーぞ！」

居間の扉を音を立てて開け、高校の制服に身を包んだ海斗の兄、陸が玄関に置いてあつた海斗の学生カバンを投げつける。

海斗と葉は足元に飛んできた学生カバンを、ジャンプ一番跳んで避けることに成功した。

「怒割れたら、兄ちゃんのせいだからな！」

「いいや、おまえのせいだ。邪魔だから、学校行け！」

陸は不機嫌な顔のまま、もう一度、扉が壊れるんじゃないかと思うほど、叩きつけるようにして出て行つた。

居間に残された三人が、なんとなく居心地が悪くなり、まだいつもより早い時間だが出発することにした。

少ししてから居間を出ると、台所から出てきた陸とぶつかる。

「まだ行つてなかつたのか」

「つるさいな。タラタラしてるのは、兄ちゃんと兄弟だからだろ」

顔を合わせていがみあう一人に、母が台所から、やかましいと一喝する。

目だけで、おまえのせいだと一人ともにらみあい、すれ違った。少しだけ驚いた顔をして、桜はそれでも陸を見上げた。

「陸兄も、ケンカするんですね」

「そりや兄弟だから、毎日だな。気に入らないんだよ、あいつ。向こうもそうだと思つけど」

苦笑しながら、真ん中分けにした前髪に手をやれば、桜が目を細めて笑う。

「陸兄、あのね昨日ちょっとあつて、考えたんだけど。私、一人っ子だし。親の転勤とかで、色々大変だつたりしたんだけど。兄弟とか、うらやましかつたんだと思つ。ケンカしても、どつかで分かり合つてる人がいるのが、うらやましかつた」

陸から視線をはずして、桜は小さく笑つた。

その笑顔のまま息を吸い込んで、陸の目をしっかりと見る。

「私、違つたみたいで。でも、陸兄が嫌いになつたとかじゃなくて、大切にしたい人つていうのは、そのままなんですけど。お兄さんつて感じで。さつき、なんとなくそれに気がついて」

「ああ、聞こえてた。オレの部屋、居間の真上だからな」

「その、ごめんなさい。つていうのも、変なんだけど」

どう言つたらいいのかわからず、桜はとにかく頭をさげた。

陸はその頭を軽く叩いてやると、驚いた顔で。しかし嬉しそうに少女は笑う。

玄関の柱の陰からのぞいている一人に気がつき、陸は口の端を持ち上げた。形のいい少女の耳に口を寄せる。

葉があおるように歓声をあげれば、同時に海斗が飛び出し、桜の腕をつかんで憎き兄から引き離した。

腹を抱えて笑いながら、陸は台所へと消えた。

つまらなそうに口をとがらせた葉の腕も引っ張つて、海斗は足を踏み鳴らして外に出る。

「むかつぐー、あいつ、マジなぐりたい！」
「桜！ どうだつた？ どんな感じだつた？」
「か、感じつて！ 葉、セクハラでしょ！ それに、そういうんじ
やないし」

それぞれのテンションは違つたが、真つ赤になつた桜の言葉に、葉がつまらないと不満の声を盛大にあげた。

「陸兄、なにやつてんだよ！ ばつぐんのタイミングだつたのに」「バカ言うな。なにもないのが、当然だろ」

「海斗くんにとつては、そうでしうねー。中学生男子としてはだな、そんな展開のぞんてなどいないのだよ」

「……こんな展開になつて、心底安心したと思うのだよ」

二人の掛け合いを聞きながら、桜は一人の背中を容赦なく突き飛ばした。

悲鳴をあげて、たたらを踏む一人を追い抜いて、振り返る。

「陸兄が、なんていつたか知りたい？」

もちろんだ！ と、力強く言つ一人のニュアンスは近くとも遠い。だが、瞬時のその反応に、桜は意味ありげに悩む振りをした。

「桜、兄ちゃんなんて言つたんだよ」

「秘密。やつぱり、まだ秘密。私、今日中にでも全部解決させるから。それからね」

まつすぐ見つめてくる強い瞳に、海斗は少し考える。

自分が三人を呼び出す予定でいた。だが、桜が先に話をしたほうがいいのではないか。とも思つたのだ。本当にいじめにつながるのであれば、まず本人がぶつかつてみないことには、終わりはないんじゃないかと考えた。

こつそり後をつけて、暴力に発展するようだつたら、助ければいい。

そこまで考えて、海斗はうなずいて見せた。

「桜、一人きりなんかじや、ないんだからな」「うん、わかつてゐる。ありがと」

校庭に足を踏み入れれば、黒髪を右耳の下で一つにくくつた少女が、三人を見つけ、駆け寄ってきた。桜が早くに出たことを聞いて、慌てて走ってきたのだという。

ほぼ一本道で、追い抜いたはずはないのに、テニスコートにもどこにもいない桜を探し回っていたようだ。

「もう！ 心配したんだから！」

「ごめんね、真樹。私、負けないことにしたから。心配してくれて、ありがと」

それでね。と、陸が桜にしたように、真樹の耳に口を寄せた。はっとして、真樹は海斗を見る。そして桜に向き直り、真剣な顔で少女の手をにぎりしめた。

「いいの？ 本当に？」

「うん。でも、まだ内緒ね」

「もちろんだよ。私の口から言つことじやないし」

頑張つてと、真樹が声に乗せれば、嬉しそうに桜が笑う。取り残された男二人は、入り込めないもどかしさに、ただ顔を見合させていた。

「なんかさー。あれこれ考えなくとも良かつたのかなって思つたんだけど」

「まあでも、桜が元に戻つたみたいだし。それだけでも良かつたよ」

「……海斗は、それでいいだろうけどな」

「なんだよ。他になにがあるのか？」

校舎に入ろうとしたとき、後ろから視線を感じて、海斗が振り返る。

小野と三津、西田がこちらを見て、眉をひそめて顔を寄せ合つているのが見えた。

「あいつら」

海斗の声に、残りの三人が振り返れば、彼女達は少し話し込んでから、こちらに向かってくる。

校舎の入り口にいるのだ、歩く方向はどちらにしても海斗達がいると

「ううなるだわ！」

そのまま通りすぎるかと思えば、小野が声をかけてきた。桜ではなく、海斗にだ。

「鈴木くん。少しだけ、話を聞いて欲しいんだけど。いいかな？」

「ボク？ なに？」

「ここじゃ、言いづらいから。場所移してもいい？」

「ここで言えないことかよ」

桜になにか入れ知恵をしたのだと想うほど、言葉が冷たいものになる。

その言い方が不思議に思つたのだろう。少しばかり氣後れしたよううに、小田は少し肩をすくめた。

「海斗、いいから。聞いてあげて？」

助け舟を出したのは、なぜか桜で。海斗は驚きを隠せなかつたが、仕方なくうなずくしかなかつた。

そんな桜を、三津がにらみつける。桜の左腕に、真樹は両腕をからめてにらみ返す。それがしゃくにさわつたのか、三津が怒りをむき出しにしたまま、一步足を踏み出した。

だが、それを西田が呼び止める。

「三津、いいからー。鈴木くん、じゃあ少しだけ時間をくれる？」「別にいいけど」

西田が背中を向けたとき、桜が声をかけた。

「西田さん、後で私も話があるの」

足を止めて、嫌そうに振り返つてくる。

「……私には、ないけど？」

「じゃあ、今聞いて。私、別にだましてなんかいないから。ちゃんとわかつたの。だから、私も西田さんに負けないよう努努力するつもり」

言い切れば、小野と三津の顔に、はつきりと嫌悪と怒りが見て取れた。

だが、桜も引く気はないのだろう。胸を張つて立ち向かう気持ち

を前面に押し出していた。

西田を先頭に、海斗を囮んだ状態で、三人の少女達は校舎の陰までくる。

「で、なんだよ」

開口一番、自分でもきつい言い方をしていると感じながら、ぐるりと三人を見回した。

桜の悪口でも吹き込んでくるつもりだらうか。警戒心は、不機嫌な表情を生み出す。

西田は、おびえたように手を口元へと持つていく。残った二人も、顔を見合せたが、口を開いたのは小野だった。

「田下さんは……」

「聞きたくない」

桜の名前が出たら、こう答えるよつと思つていたところパンポンポンでできた言葉を、ぴしゃりと抑え込む。

しかし、それでも三津が小野をかばうよつに一步前に出て、責める口調で海斗にかみついた。

「聞いてよ！ 大事なことなんだから」

「聞きたくないって言つたら。陰でこそこそ人の悪口を言つな。うざい」

今度は、確実に傷つけるつもりで言つた。男子にそこまで言われたことがないのだろう。三津は顔を青くし、小野は泣き始めた。

少しばかり心が痛んだが、聞きたくないものは、聞きたくないのだ。海斗が二人から目をそらし、西田へと向き直る。

「それだけ？」

だが、西田は青い顔をしながら、懸命に首を横に振つた。

「違う、違うの。あたし……あたしは、鈴木くんが好きなんです」

今までのフレッシュナーに、押しつぶされそうになりながら、必死に声を出す西田に、海斗は目を丸くした。

「は？」

突然の出来事に、脳みその処理が追いつかない。海斗はただ口を

開いて、西田を見つめる。

西田はその視線に耐えられないといつよつと、顔を赤くしてひりひりいた。

「鈴木くんが、好きなの」

「え……と。そうなんだ。でも、ごめん」

「日下さんのせい？」

顔をあげ、悔しそうに唇をかむ西田を見て、海斗は前髪を横に揺らした。違うという意思を見せるために。

「桜のせいじゃないよ。ボクがまだ、桜を好きなんだ」

「だつてそれは、日下さんがはつきりしないからでしょ？ 鈴木くんのお兄さんが好きとか言つて、鈴木くんにだつてちょつかい出して」

反論する意欲を取り戻したのか、三津が食つてかかる。その勢いに乗つた小野も、うなずいた。

「そうだよ。そういうの、二股つていつんだよ？ 鈴木くん、だまされてるんだよー！」

だまされるといつも言葉を、不愉快に感じた海斗は、眉間にシワを寄せる。

「このところ、振られた振られたと言われ続け、頭にきていたこともあった。ハつ当たりに近くなつてしまつたが、それでも海斗はうつむくことなく、大声を出した。

「おまえらには、関係ないだろ！ ボクが望んで、そうしてもらつてるんだ。悪いのか！ 全部、自分のためだ。どっちかって言えば、桜のほうが被害者だろー！ なにも知らないやつが、とやかく言つながら、やはり自分はストーカーに近いのではないかと、自己嫌悪になる。だがそれを振り払つように、頭を振つた。

「話は終わりだよな。今後、桜になにかあれば、真つ先におまえらを疑つてやる」

「そんな……ひどいー！」

涙に顔をぬらした西田が声をあげれば、他の一人も抗議の声をあ

げる。

海斗は背後にいた二人を押しのけて、振り返った。

「ひどいのは、どっちだよ」

三人の少女達が、海斗の悪意ある低い声に、息をのんだ。引き止める声もない。海斗は、そつとため息を吐きながら、校舎の角を曲がる。

目の前には、しまったという顔の親友達が、顔を引きつらせて重なり合っていた。

「……聞いてると思った」

「バレたか！」

三人とも立ち上がり、葉が大きな舌を見せてくる。

「今までの行動考えれば、聞いてないはずないもんな」

苦笑して、額に軽くチョップを入れる。その右手を白刃取りしつつ、葉が口をどがらせた。

「なんで、おまえばかりモテるんだよ。おかしくね？」
「知らないよ。でも、好きでもないヤツからモテたって、仕方ないだろ」「お……まえ！ やつぱり男の敵だ！」

大騒ぎし始めた葉を無視して、海斗が桜に謝った。

「桜、ごめんな。ボクのせいで、嫌な目に合わせちゃって」

「海斗のせいじゃないでしょ！ 私が好きってなにかわからないうて言つて、甘えてたんだと思う。ごめんね」
話の内容が、海斗に不利な方向へといつてしまつて、桜のせいで、海斗はまたしても振られてしまつた。このままこのままこの勢いのまま、海斗はまたしても振られてしまつたのではないか。という悪い予感しかしない。

それでね、と続けた桜の声を聞かなかつた振りをした。

「桜のせいじゃないって！ 良かった、すつきりした！ これで今まで通りだ」

そう言つて、慌てて走り出し、頭を抱え続ける葉にタックルをかます。

一人して大騒ぎしながら、校舎内に消えていく。真樹は小野達が来る前にと、桜をつながす。

歩き出しながら、桜は困ったように笑つた。

「ねえ、真樹。言つタイミング、なくなつちゃつた

「また後で機会をみればいいよ。ね？」

「……うん。でも、こんなにも勇気がいるんだ。どうしよう、真樹。

どうしてみんな、告白できるんだ？」

海斗からの告白は、事故のようなものだつた。

だが、西田は海斗を正面にして、はつきりと告白していた。桜は、その勇氣に尊敬にも似た気持ちを持っていた。

「西田さんは、本当にすげえと思つ」

「じゃあ、ゆずつてよ」

突然、後ろから三津が怒りを込めた声をかけてくる。

長い三つ編みを揺らして振り返つた桜は、泣いていの西田を見て、胸がつかまれたような痛みを覚えた。

しかし、ゆずるゆずらないの話ではないと、彼女達をまっすぐ見据える。

「好きつて、そういうのじゃないでしょ。告白できる勇気つて、本当にすごいこと思つ。でも、好きつていう気持ちをゆずり合つて、違うでしょ」

「一股女のくせに！」

「それも違う。私、陸兄には振られてるし。それに……今日、陸兄にはちゃんと海斗が好きなんだつて伝えてきたから」

敵意しか向けてこない三人に言つたことで、桜の中でつつかえていたなにかが、はずれた気がした。

陸に言われた言葉を思い出す。

あこつは面倒くさいけど、田下さんの選択は、正しいかもね

桜はいつものように胸を張り、楽しげに笑つて見せる。

「海斗が好き。私もゆずれないし、西田さんもゆずれない。それで

いいじゃない。そういうものでしょ」

じゃあ先に行くね。と軽い足取りで、真樹と校舎の中に消えていった。

つた。

残された三人は、口を結んで、顔を見合させるしかなかつた。

*

三階の窓からは、テニスコートの様子が見て取れる。

元気良く声を出して、朝練に励む生徒達を見下ろして、海斗は安堵のため息をついた。

「良かつたな、海斗。とりあえず泣くことはなくなつたわけだ」

「……黙秘」

「良かつたな。泣かずにすんで」

からかうように繰り返す葉に、海斗は窓からも葉からも田をそむけ、前髪をさわる。

続々と一年生が登校し、すぐに藤本部長や河合副部長も顔を出す。「さて、一人とも。署名はしてきただろうね

「あ、してません」

署名欄は空白のまま、海斗がカバンから取り出し、部長に手渡す。

「あ、ボクもボクも」

そう言って葉も差し出せば、笑みを浮かべたまま、凍りついた。

「大切な人を助けられなくても、いいのか？」

ゆつくりとさとすように言う藤本部長に、海斗は笑つた。

「本当に大事な人なら、地位とか関係なく、助けるのが当然だと思うから。ボクは生徒会には入りません」

「ボクも。けつきよく、なにが大切かっていうのは、自分で決めるものだと思つし」

葉もうなづけば、河合副部長が快活に笑い声をあげる。

「藤本、おまえの負けだな」

「いいやー、まだだ。将棋で勝負しろー。オレに勝てば……」

「勝負はしません。ほら、試験勉強しないと。なあ」
海斗が眞面目な顔を作つて、親友を見る。

「おう、試験勉強な。やつとかないとな！」

葉もにやりと笑い、今思い出したとばかりに、カバンへと手をのばした。

一人して、適當な教科書を引っ張り出して、藤本部長を見る。
「藤本部長が言つたんですね。赤点は、許さないって」「言つてた！ それに、初めての文化祭だもんな。張り切つて勉強しないといけないですよね？ 先輩」

屈託のない笑顔を向ける一人に、藤本部長は笑顔のまま、一枚の紙をにぎりつぶす。

彼からただよう殺気に、海斗と葉は教科書に視線を落として、気づかない振りをした。

「おまえら！ 先輩をこけにして、ただじゃおかんぞ！」

「うわ！ 開き直つた」

葉は、知らん顔で通そととしている一年生のほうに走れば、逃げ遅れた海斗の肩を藤本部長がつかんだ。

「恐怖政治、反対！」

悲鳴に近い声で叫ぶが、そのまま窓に押しつけられる。

ひんやりとしたガラスの感触を頬に受けながら、下を気にすると、駐車場でストレッチをしている女子達がこちらを見上げ、笑つているのが見えた。

その中に、長い三つ編みの少女を見つける。こちらを見上げて笑いながら、またやつてる、と口が動く。
はつきりとそれを読み取り、海斗は頬の痛みに耐えながら、胸が熱くなつた。

泣くことはないが、この状態でも嬉しそがこみあげてきて。海斗は、苦しい体勢のまま小さく笑つた。

(後書き)

読んでくださって、本当にありがとうございました！

いつもに比べ、かなり長くなってしましました。

いらない部分をばぶいて、もつと桜とーとも思ったのですが、なん

となくこのほうが時間っぽいかな？

と、そのままにしてしまいました。すみません！

久し振りすぎて、いろいろ違つてないかと心配ではあります。

楽しんでいただけたら、嬉しいです

本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4255p/>

動きゆらぐ時間

2010年12月11日00時42分発行